の白いパン、黒いパン、細長いパン、丸いやわらかいパン、かたそうなパン、お菓子のようなパン、私はそれまで、サンドウィッチのパンは一種類しか考えていませんでした。カウンターの中の男は、どのパンの上に乗せるのかを尋ねていたのです。確かに、一列に並んでいる人達もよく見ると肌の色も髪の色もいろいろでした。やれやれと思っていると、また、言いました。

『イート　ヒヤ』、又、わかりません。後ろの人達は、依然黙っています。

これは、ここで食べる「イート　ヒア」か、持って帰るか「テイク　アウト」を尋ねていたのです。その後、こういった風景は、切符売り場など列を作ったところでも、よく見かけました。彼らは、自分の順番になるまでは実に気長に待っています。日本では、前の方でゆっくりしていると、後ろの方から、

「何をしているんだ」という声がかかるのがありふれたことでしょう。

列といえば、女性便所は便所の外で並びます。ブースの前では並びません。屋外便所などの男性の便所の時も同じように外で並ぶのを見かけました。レストランの待ち方も同じです。

当時アメリカはベトナム戦争中でした。日曜日の午前には、テレビで今週の戦死者を流していました。事務所の中で、働いている人達にも、外国から来ている人がかなりいました。入社と同時に社会保障(social security)の No.をもらい、税金を払うことによって、アメリカ人の職場を奪いながら、アメリカ人と同じ利益を得ていた訳で、当然ベトナム徴兵を、もし、拒否して本国へ帰れば、二度と再びアメリカへの入国許可はされないと聞いていました。外国人達はそれぞれの国の技術力、考え方の背景を持って同じ見方ではなく一つの仕事に取り組んでいました。私はいつもスパイと呼ばれ、働きすぎと、同僚に言われて、いました。12 月 7 日の真珠湾の日には（日本では 12 月 8 日）には、「明日、出てくれば、何があるかわからないぞ！」と冗談半分に脅されました。それでも構わず出勤して、段々に親しい友人たちができ、国際的な仕事にも参加出来てきました。

南アフリカ、ヨハネスブルグの放送局では、人種が違うという理由で、出入口が、別々に存在し、中は完全に区画されているが、一つの建物でした。又、ハーバード大学の地域冷暖房計画は、それが全部完成するのが 2000 年を過ぎるものでした。又、ある日、私を雇い入れた人事担当者のニールソン氏が一つのミスをしました。カナダからの移民の技術者 10 数人のアメリカビザ更新の手続きを間違えたため、全員強制送還ということになりました。それまで彼は個室を持ち、秘書を持っていたのですが、私の横の席に降格されてきました。そして、我々と同じように、紙の袋の中にサンドウィッチを持ってきて昼食としていました。

私がアメリカ生活から学んだものは、その**多様性**の輪の広さです。これは、日本人がその考え方において最も不得意としているところではないでしょうか。たとえば一つの物事を考えるとき、どれだけの断面で切ることができ、どれだけの角度からそれを眺めることができるかということです。世界中の人々にはいろんな人がいるということは、いろんな